

秋建時報

秋建時報

平成20年11月1日(第1175号)



発行/(社)秋田県建設業協会
秋田市山王四丁目3番10号
TEL 018(823)5495
FAX 018(865)2306

<http://www.a-kenkyo.or.jp>



山はもう大分白くなってきた。
小鹿よ、母さんの待つ暖かい巣に、
道草せずに早くお帰り…

「小鹿(帰巢)」 絵・文：白澤 恵舟

信頼回復のとき(上)

会長 菅原 三朗

今年度の東北建設業協会連合会ブロック会議は10月24日、宮城県の当番で仙台市に於いて開催された。ブロック会議前段の地域懇談会では、国交省と各県正副会長により、今後の地域の中小建設業者が経営を持続していくための方策について、フリートークが行われた。

私は所信の一端を申し述べたが、地域の公共工事の施工の担い手として長年にわたり、その推移を見てきた者として、かつて昭和30年代、40年代は国民世論としても地域のインフラ整備は喫緊の課題であり、特に道路整備の進捗度合はその地域の文化のバロメーターとまでいわれた。

社会資本の整備を促進し、経済・産業・文化の振興・生活水準向上のための公共事業は、多くの地域からの強い要望にもとづいて行われてきたものであり、そのため発注者も受注者も大きな社会的

使命と誇りをもって、事業の遂行にたずさわってきたものである。

公共事業(工事)には国土発展のための、インフラストラクチャー(下部構造)を支えていくのだという品位(品格)があったと思う。従って発注者も受注者(施工者)もお互いに協力しながら、よりよい事業の執行を目指した共通認識(パートナーシップ)があり、又現場の施工においても発注者側の担当者と現場の主任技術者とは設計思想の共通認識のもとに、お互いに技術の研鑽をしながらより品質の良い工事の完成に向けた情熱と良好なパートナーシップがあった。

しかし、バブルの崩壊による不況克服と景気浮揚のための公共工事に対し、大手ゼネコンは工事受注のため地方自治体の首長等に対しての、なりふりかまわぬ賄賂攻勢が大問題となり、知事や市長の摘発が相次ぎ国民からは大きな批判を浴びた。

また一部の評論家の誤解やマスコミの誤った報道により、公共事業はムダなものが多くそれが国の財政を悪化さ

せており、又入札・契約制度も不透明であるなどといわれ、これにたずさわる建設業者は悪であり公共事業と建設業界に対する不信は完全な世論となってしまった。

このような間違った世論に対し我々地方の業界は、県民・地域住民の不信を払拭し信頼を回復するため、様々なイメージアップ活動を展開してきた。秋田では15年にも亘ってランドアート(市民参加の建設フェア)の開催や、ボランティア活動の一環としての「子供見守り隊」現場への往復車にステッカーを貼付するなどはじめ、地域の基幹産業(県民総生産の10%・雇用の12%)としての自負のもとに、地域の安全・安心の確保のため災害発生時など一旦緩急ある時は、地域住民の生命財産を守るため率先して活動を展開してきたところである。しかし、我々地方業界の心をこめたイメージアップ活動や社会貢献活動までも、一般の人々には単なる業界のパフォーマンスではとしか受け取られなくなってしまった。

《つづく》

更なる調査基準価格の引き上げを求める

東北建設業協会ブロック会議

東北建設業協会連合会（宮城政章会長）は10月24日、仙台市のホテルメトロポリタン仙台において、東北建設業協会ブロック会議を開催し、今般の諸問題について意見を交わした。

会議冒頭の挨拶において宮城連合会長は、米国発の金融危機などの影響で金融機関の融資が厳格化していることを指摘し、政府の緊急経済対策の早期実現を求めた。また、入札契約制度改革については「地域の建設業が生き残れるように発注者は責任とスピードをもって対処してほしい」と訴えた。

会議には、国土交通省から小澤建設流通政策審議官、岡田東北地方整備局長、浅沼全建会長が出席。挨拶の後、議事に入った。

議事では、「強く美しい東北」を実現するための公共事業予算の重点配分など、11項目について協議を行った。

この中、本会の菅原会長は「建設業の生産性向上による建設業界の活性化」について発言。ものづくりに携わる

人々の社会的向上と待遇改善のため、受発注者間の片務性を排除するとともに、三者協議、ワンデーレスポンスの普及を求めた。

会議の最後、▽東北地方への公共事業予算の重点配分▽20年度下期補正予算編成▽21年度公共事業予算への災害予防対策費の措置▽生活道路と高速交通体系の早期整備▽品確法に基づく総合評価方式の地方自治体での完全実施▽低入札調査基準価格の引き上げ▽会員企業の正しい評価と地元中小建設業者の受注量の確保・拡大の7項目に渡る決議案が満場一致により承認された。



34年の歴史に幕

秋田県建設技術協議会 第35回定時総会

秋田県建設技術協議会（菅原三朗会長）は10月28日、秋田ビューホテルにおいて第35回定時総会を開催し、同協議会の発展的解散を決定した。

はじめに菅原会長は「時代も移り変わり、これまでの技術の研鑽にとどまらず、無事故・無災害による安全施工により地域住民のためにより良いものを提供することが今、我々に求められている。今後を見据え、本会のあり方、目的を今一度確認し、会員の継続的な発展と地域への貢献を目指した組織作りが肝要であると考える。本日はこうした経緯を踏まえた本会の発展的解散についてお諮りする。」と挨拶。

その後、議事では解散についての審議がなされ、満場一致を持って解散を決定した。

昭和49年に設立した同協議会は、県内建設企業約80社で構成。これま

中小企業の窮状を訴える

全国府県建産連会長会議

全国建設産業団体連合会（以下、全国建産連・田村憲司会長）は10月2日、秋田ビューホテルにおいて全国府県建産連会長会議を開催。全国建産連傘下団体・関係団体、国土交通省などから約110名が出席し、建設産業における課題について意見を交わした。

会議の始め、開催県を代表して挨拶した秋田県建産連の菅原三朗会長は、業界の危機を指摘。「経済活性化、雇用確保で地域に貢献してきた建設業が今や存亡の危機。政治・行政・業界が一体となった活動が必要」と述べた。

続いて挨拶に立った全国建産連の田村会長は、「公共事業予算の減少も大変だが、それ以上に低価格受注が大きな問題」と述べ、「地域の老舗建設業者の倒産が増えており、災害時の応急対策などを考えると大変な状況」と現状に警鐘を鳴らし、これらに歯止めをかける必要性を訴えた。

会議では、各府県建産連会長より業界の課題を提起。▽道路整備に必要な事業費確保▽価格以外の要素を併せて評価する総合評価方式の導入・拡充▽ダンピング受注の徹底防止▽予定価格事前公表の廃止▽市町村への総合評価方式の拡充等を国土交通省へ要望した。

また、秋田県の菅原会長は地方建設業が資金調達の多くを地方金融機関に依存していることに触れ、「地方銀行がこれまでの継続取引を止めれば、建設業が破綻する」と地方業界の窮状を訴えた。

これらの課題提起・要望に対し、来賓として出席した国土交通省の小澤敬市・大臣官房建設流通政策審議官は金融庁と連携して対策を講じる方針を提示。事業予算確保など国の取り組みを説明した。併せて、関克己大臣官房技術審議官が「調査基準価格の引き上げ、設計変更のスピードアップといった課

題に積極的に取り組み、採算性の問題の解決を目指したい」との方針を示した。

会議の最後、秋田県の菅原会長が8項目の決議を読み上げ、より一層関係機関と連携を図り、行動していくことを誓った。



で34年間にわたり会員相互の技術の研鑽、安全講習会等を中心に活動を展開してきたが、設立初期の目的を果たしたとして解散する運びとなった。



(財)建設業福祉共済団から 建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

情報コラム Vol.24

原材料価格高騰対策等緊急保証制度 10月31日から始まる

経済産業省、中小企業庁では10月31日より原材料価格高騰対策等緊急保証制度を開始しました。

同制度は、指定業種（545業種、建設業関連は全て対象）に属し、売上減少または転嫁困難について市町村長の認定を受けた中小企業者を対象とし、2億8千万円（うち無担保8千万円）まで別枠で保証可能、責任共有制度の対象外（保証協会が100%保証）となっています。

期間は平成20年10月31日から一年半を期間。以下のいずれかの要件に当てはまる方が対象となります。

指定業種に属する事業を行っており、

▽最近3ヶ月間の平均売上高等が前年同期比マイナス3%以上の中小企業者

▽製品等原価のうち20%以上を占める原油等の仕入価格が上昇しているにもかかわらず、製品等価格に転嫁できていない中小企業者。

▽最近3ヶ月（算出困難な場合は直近決算期）の売上総利益率又は平均営業利益率が前年同期比マイナス3%以上の中小企業者

詳細は中小企業庁ホームページに掲載されていますので、利用を検討の際はご参照下さい。

http://www.chusho.meti.go.jp/kinyu/081021ki_kyu_hosho.htm

(中小企業庁ホームページ)

近代化 遺産の 土木 建築

No.74

旧鮎川小学校

由利本荘市南福田字上鳴瀬 1 - 3



旧由利町北端、子吉川支流の鮎川沿いの南福田地区にある旧鮎川小学校は、かつてどこにもあつた懐かしい学校建築である。近年の少子化にもなつて由利地区に三校あつた小学校は統合されて現在由利小学校となつている。

旧鮎川小学校の沿革が書かれた記念碑が小学校の前庭に残されている。それによると、この小学校は明治七年（一八七四）、現在地よりやや上流部にある町村の瑞光寺を仮校舎として開校した。同二六年（一八九三）一月二二日に東鮎川字山崎に校舎を新築移転し鮎川小学校となった。さらに昭和二九年（一九五四）、鮎川中学校がこの鮎川小学校がある土地に新校舎の竣工をみた。その後、昭和四五年（一九七〇）にここが由利町立鮎川小学校となつて平成一六年三月に閉校となるまで地域の学び舎となった。小学校は一三〇年の歴史

に幕を閉じたが、この間の卒業生は三一五五名を数えるという。

校舎は築後五〇年を経ているが、地元産の良質な杉材を使っているため、今も堅牢そのものである。木造平屋切妻の校舎が三棟と体育館が南北に並び、それぞれ渡り廊下で結ばれ、分舎化された校舎の切妻と瓦葺きの屋根が非常に落ち着いた雰囲気を感じさせている。学校敷地は二四・五〇四㎡、校舎面積は八・五七二㎡である。

校舎の内部もまた昭和の教育遺産ともいふべき立派なもので、純和風の礼法室や音楽室、木質の体育館、それに外部の日本庭園、桧並木などまわりの環境ともよく馴染んでいる。現在、文化遺産として保存と活用が卒業生はじめ地元有志の方々によつて検討されている。

（取材・構成／藤原優太郎）

K2に登った女性

永井登志樹

図書館の郷土資料のコーナーに、『K2 2006 日本人女性初登頂・世界最年少登頂の記録—東海大学K2登山隊』（東海大学出版会）という本があったので、借りてきた。

世界第2の高峰、ヒマラヤのK2（標高8611m）は、極端に登頂成功率が低いことから、世界で最も登攀困難な山として知られている。一昨年の夏、東海大学山岳部創部50周年記念事業のK2登山隊がこの山に挑み、秋田市出身の小松由佳さんが日本人女性として初めて登頂に成功した。本はその登山の概要を網羅した報告書だが、同時に迫真の登頂ドキュメントの記録集というべきもので、この中に小松さんが書いた「頂上アタック」という手記が掲載されている。それにはアタック開始から登頂、下山までの様子が生々しく語られているのだが、一読して、彼女の文章表現のうまさに驚いた。

登頂してから下山開始後、アタック隊と無線連絡が途絶え、消息不明の事態に陥ったため、ベースキャンプでは遭難を危ぶんだ。その時、小松さんとパートナーの青木達哉隊員は、体力の消耗とアクシデントなどから、酸素ボンベも切れた無酸素状態で8200mでビバークしていた。こんな高所でのビバークは命を失う危険性があり、実際に遭難一步手前だった。マイナス25度の気温で仮眠をとり、目を覚ました時のことを、彼女は次のように書いている。

「6時頃、頬に強烈な温かみを感じて目を開ける。眼下に、雲海が紫色に広がっていた。その遙か彼方から、太陽がいま昇ろうとするところであった。光の筋が無数に空に伸びて広がっていく。私たちが座っていた山肌も、太陽の光に白く輝いた。光の中にあるような感じがして、そのあまりの美しさに涙が出た。世界はただ美しかった。人間が見てはいけないものを見た感じがした。生まれてきた瞬間を思い出すような、そんな気さえた。太陽や雲や風が、二人に“生きなさい”と言ってくれているように感じ、この世界に戻りたいと強烈に思った」

落石に何度も遭遇しながら、ようやくビバーク地点からK2の肩（山頂近くに張り出した平坦な尾根）にあたるテント設営地（C3）まで下りたとき、そこで小松さんは付近にいるはずのない外国隊の話し声と、テントに近づいてくる足音を聞いたという。

「このK2の肩、雪に埋もれたテントの中に、数体残されたままだといわれる遺体の誰かが来たのだろう。ずっと冷たく寒いこの場所にて、きつと寂しかったのだろう。よくよく思い出してみると、語りかけるような静かな声だった。だが、あの声が聞こえたとき、テントを開けずに良かったと今でも思う。もし開けていたら、私たちは二度と戻れなかったような気がしてならない。やはり、この場所は死の地帯なのだ、何か違う存在があると感じた」

同県人ということもあって、彼女の講演録やインタビュー記事などをこれまでも興味をもって読み、強靱な体力と

意志の強さ、そして冷静な判断力を持ち合わせた女性であることは知っていた。今回彼女自身が書いた文章を読んで、それに加えてこの人の持つ謙虚でピュアな精神、純粹さに打たれた。そのことは、ともに登頂に成功した青木隊員（世界最年少でのK2登頂）にもいえるように思う。小松さんにとって、青木隊員は大学の後輩ということで、これまで培われた信頼関係、上下関係がしっかりしており、パートナーとしてベストだったのではないかな。

この2人が下山した直後、頂上を目指していたロシア隊が雪崩により遭難、4人の犠牲者を出した。一方、経験は未熟だが、功名心や個人のエゴなど無縁で、まだ少女と少年の面影が残る若者2人は生還を果たした。山での生死を分ける境とは、どこにあるのか私のような素人には分からないのだが、手記を読むと2人が無事下山したのは、単に運がよかっただけの結果ではなく、人智を越えた何かが作用していたように思えてならない。

ところで、ここで個人的なことを述べさせてもらおうと、実は私の妻も山に魅せられた、いわゆる「山屋さん」と呼ばれる人種で、クライマーの端くれである（もちろん小松由佳さんには遠く及ばない未熟者であるが）。

妻は40代になって突如山登りに目覚めて山岳会に入り、初めは普通の登山道を登っていたのだが、ロッククライミングの技術を取得し、次第に岩壁や沢などの一般的な縦走路以外の難関ルート（バリエーションルート）ばかり挑むようになった。ついには北アルプス、谷川岳などの日本の山だけではあきたらず、ヨーロッパアルプスに遠征して、一昨年夏はマッターホルン（標高4478m）とアイガー（3975m）、今年の夏はモンブラン（4810.9m）の登頂を果たしてしまった。

以前、NHKBSの「日本の名峰」という番組で、今井通子さん（アイガーなど3大北壁女性初登攀という快挙をなしとげた登山家）が、ヨーロッパの山は岩の質が花崗岩でザラザラしているが、日本の谷川岳などは変成岩でツルツルしているので日本の岩場のほうが難しい、と言っていた。残雪期の北アルプスの高峰や谷川岳などに登頂できる程度の技術・経験があれば、ヨーロッパアルプスもそれほど難しくはないということか。とはいっても、これまで何人ものアルピニストの命を奪ってきた国外の高山に登ることが、心配ではなかったといえば嘘になる。

ただ、身内自慢をするようで恐縮なのだが、妻の体力と集中力、何より50代になってからのチャレンジ精神には感心する。東北の低山徘徊専門の軟弱男である私は、そうした力強さを皆無とってよいほど持ち合わせていないので、妻がなんだか私のついていけない世界にいるようで、少しサビシイ気がしたのは確か……。

ヨーロッパアルプス登頂を果たし日本に帰ってくる妻を待っている時、日本人初の女性宇宙飛行士、向井千秋さんの帰還を待つ向井万起男さんもこんな心境だったのでは、とふと思ったりしたのだが、こんなことを言ったら、向井万起男さんに失礼ですね。